

山形張子について

第五卷 三 岩 城 久太郎（八十五才）

山形は六百余年前、斯波兼頼によって開かれた城下町です。城下町には職人町をつくり高度な技術を持つ、職人達を手厚く保護したと言われております。

職人の町、鍛冶町・銅町・歩町・塗師町・桶町・ローソク町・銀町、等々沢山あり、特に山形鑄物、山形仏壇は伝統工芸品として、国の指定を受けております。以前は三十二業種がありましたが、現在二十の業種が山形の伝統を守り、職人の技を磨き生産に励んでおります。

さて、その一つ山形張子について申し上げます。かぐや姫や、舌切り雀、七福神、天狗面、おかめ、ひよつとこ、民話や、十二支をモチーフにした郷土玩具山形張子は、幕末安政の頃、京都嵯峨の出身で、渋江長四郎が、山形市下条町に土着し、仏像や面ダルマを作っておりましたが、鈴川の双月が和紙の生産地で、山形の歩町で和傘を作っており、張子の技術を広めようと、京都嵯峨人形の手法によってお面やダルマを作ったのが山形張子の始まりです。

先づ先代より伝わって来た本型が約五百個程あり、木型に油を塗って、ちぎった和紙を水張りした上に、上質紙をふりで張る。一般には四枚、大きいのは八枚和紙を重ねていく、天日で乾かした後、小刀で切り取って木型から外す。切れ目を和紙で目張りして、原型を仕上げる。底の部分に重しになる粘土をつけ膠で溶いた胡粉を塗って白い肌化粧にする。最後に絵付け、細い筆が一つ一つ、違った表情を生み出して出来上がりです。

もともとは、子供のおもちゃで、お盆には張子の面をかぶりお墓の陰から飛び出したりして遊んだものです。今はゲームとか、コンピュータとか、そういうものが子供の遊びの主流になってしまいました。

和紙も洋紙、セルロイド、ビニールとなり時代も変わりました。買いに来る方も大人の方が子供時代遊んだ思い出を懐かしんでと云う人がほとんどです。

父徳次郎は渋江長四郎に弟子入りして、私は父のあとを継いで七代目、六十五年になります。

時の流れの早さにびっくりしておる最近、平成十一年用年賀切手「八十円」の意匠が「山形張子の玉乗兔」となり全国で発売されました。以来全国から注文が来まして千五百羽以上送りました。未だ注文が来ますので、県外優先、地元後回しの状態です。

後継者は孫がおりますが、この前、弟子にしてほしいと言って来た大学生がおります。給料はいくらですか？「よろしい。但し作るのに順序として一年掛かりますよ」というと短期で教えてというんです。四ヶ月で教えてもらえませんか。短大はありますが今の若い人はせっかちというか、結局弟子にはなりませんでしたが、私は六十年以上続けてますが、四ヶ月でやりたい短いスパンで作れば商売としてやれると思ってるのが私たちには判らない感覚です。若い人は私たちの様な感覚というのは、もう理解出来ないのかも知れません。

駅西口に二十四階の都心ビルが開店致しました。一階は市の観光センターに、市内の伝統工芸品が常設されておりますので、是非見学されるようお願いいたします。